

三位一体の主日 6月12日 分かち合い

ヨハネ 16-15

三位一体の祝日が正式に典礼に取り入れられたのは14世紀のことと言われますが、翻ってみれば、マタイ福音書の最後に「父と子と聖霊の名によって洗礼を受け」とあるように、初代教会(1世紀後半)から、その考えは、教会生活の中心に置かれていたようです。「父と子と聖霊」と言えば、わたしたちの祈りの前後に必ず加える言葉であり、主日のミサで唱える信条の骨格は、父と子と聖霊の神への信仰告白です。それほど、三位一体はわたしたちの信仰生活と深いつながりがありますが、はたしてどこまで、それを実感しているでしょうか。

「三位一体」(Trinity、Trinitas)という言葉は、古代の教会の激しい論争の結果生まれた言葉ですが、その根本となる考えは、旧約聖書に遡ります。今日の第一朗読には、旧約聖書の一つのジャンル、知恵文学から「箴言」が選ばれています。箴言には、昔から伝えられて来た人生をよく生きるための知恵が様々な角度から記されていますが、今日の箇所では、その冒頭の部分で「知恵」自らが語る形で、まことの知恵がいかなるものであるかを記しています。「主は、その道のはじめにわたしを造られた。…永遠の昔、わたしは祝別されていた。太初、大地に先立って。…わたしは生み出されていた。大地も野も、地上の最初の塵もまだ造られていなかった。わたしはそこにいた。」と。知恵は、天地の創造の始めからあり、創造のわざに協力した、と。新約の時代に、ヨハネが「言」(み言葉)としてとらえた、人となられた神の子が、すでにそこにほのめかされているのです。

人となってこの世に生まれ、人々と共に生きられた神の子イエスは、旧約の伝統を受け継ぎながらも、彼らのまったく思いも及ばない神の現実を知らせることを自らの使命とされました。人々にとって、時に厳しく恐ろしい、遠い存在と思われた神を「父」と呼び、いつくしみとゆるしの愛に満ちた方であり、自分がその父から遣わされたものであることをはばかりことなく明かされました。ヨハネによれば、その父と自らを一体化させたことが、イエスを死に追いやる最大の要因であったようです。先ほどの福音で読まれたように、イエスは自らが去った後、自分に代わって父からの使命を果たす父の霊、真理の霊が遣わされることを約束されました。聖霊は、イエスが教えたこと、父から聞いて人々に語ったことのすべてを教え、悟らせる、神の霊です。イエスは父から委ねられた使命を生き抜くだけでなく、その業を聖霊に委ねることによって、使命が完成されることをご存じでした。先日祝った聖霊降臨は、まさに、そのことの記念であり、イエスに託された使命の完成でした。

聖霊の働きは終わっていません。むしろ、世の終わりまで、教会を導き、わたしたち信仰者を生かし、困難の中にあっても、希望を与える方なのです。第二朗読のローマの教会への手紙で聖パウロが記すように、「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」。

イエスを信じる者は、この、父と子と聖霊の、三位の神を信じる人々であり、三位の神のいのちに与る恵みを受けた人々です。三位一体の主日にあたって、この大きな恵みに感謝しましょう。だれも自ら知ることのできない神の世界、神のいのちの神秘を惜しみない心で示し、その神の子としてくださった主イエスに感謝しましょう。そして、この神のいのちの神秘を、自らの言葉で書き記し、人類に神のいのちの宝庫を開いて見せてくれた福音史家、そして、その神秘のより深い理解・解明のため命を賭して戦った教父、神学者に感謝しましょう。また、この悟ることのできない神のいのちの神秘を自らの生き方、語り方、愛し方を通して、人々に証ししてくださったあまたの聖人たちに感謝しましょう。そして、わたしたちも自らの生涯を通して、少しでも、三位の神の愛に満ちた命を人々とわかちあうことが出来るよう、主の恵みを祈りましょう。(S.T.)